

企画課

友好交流を確認し絆を深める  
庄原市友好訪問団が中国綿陽市を訪問

10月28日～30日の3日間、木山耕三市長を団長とする庄原市友好訪問団6人が中国四川省綿陽市を訪れました。庄原市と綿陽市は、平成2年に「経済技術友好協力協定」を締結してから20年以上、友好交流を継続しています。これまで公式訪問に加え、両市の児童・生徒や議会関係者などの相互訪問などによって友好関係を深めてきました。



友好交流の継続を確認する木山市長と林綿陽市長(右)。中央は竹内光義庄原市議会議長

林書成綿陽市長ら関係者から熱烈な歓迎を受けました。綿陽市長の歓迎のあいさつに対し木山市長は「これまで培ってきた両市の信頼関係を礎として、さまざまな分野での友好関係の発展、新たな歴史づくりに取り組んでいきたい」とあいさつ。和やかな雰囲気の中、懇談が行われ、友好交流の継続が確認されました。

翌日は、平成20年に発生した四川大地震の現地や火炬実験小学校を視察。また、庄原市が支援し設置された綿陽庄原友好小学校を訪問。火炬実



火炬実験小学校全校児童による熱烈な歓迎の様子

験小学校では3000人余りの全校児童による民族舞踊などでの熱烈な歓迎を受けるとともに、両小学校で授業の見学や児童との交遊など、笑顔あふれる児童たちと直接触れ合いました。

3日目は、約66畝の農地でぶどう等を栽培している新農業公園などの視察や現地農家との懇談が行われました。

商工観光課

求職者と地元企業をつなぐ  
庄原市合同就職面接会

地元企業22社が参加する庄原市合同就職面接会を11月3日、庄原市ふれあいセンターで開催しました。市とハローワーク庄原が主催するこの面接会は、近年の厳しい雇用情勢を受け、庄原で働く意欲のある方を広く募り、直接面接による就労支援と地元企業の人材確保を目的に、平成21年度から開催しているもので、毎年十数人の内定者が決まっています。



面接会の様子

当日は来春卒業予定の学生を中心に42人が来場。就職を希望する企業との面接に臨み、担当者への説明を熱心に聞く姿が見られるなど、活気に溢れていました。

参加企業からは「面接会という形式で、応募の少ない新卒者とも面接ができ、手応えを感じた」という声が聞かれました。

高野支所

見学は来年の春までお待ちください！  
道の駅たかの雪室施設一時利用休止

高野観光交流ターミナル(道の駅たかの)に設置している雪室施設は、雪の入れ替え準備のため、11月11日から利用を休止しています。

この雪室は西日本では珍しい天然雪の冷蔵施設とあって、体験室入口には連日のように列ができ、一躍人気スポットに。中に入った感想を聞くと「夏でも雪があつてすごい」「ずっとおつたら寒い」と驚きの声が続きました。気温1度、湿度98%の貯蔵室は、希望者が加工品などを貯蔵し、雪室ブランド商品として販売。「道の駅たかの」の特産品コーナーでも売れ筋の人気商品となっています。

今年2月に4トン車で200往復して搬入した雪は、今年の暑い夏を



雪室に半分ほど残っている雪。(11月7日撮影)

乗り越え、10月末現在で当初の約半分まで減少。一旦全てを溶かした後冬の間「道の駅たかの」の周辺に積もる雪を搬入し、来年4月から施設利用を再開する予定です。

雪室貯蔵施設についての問い合わせは、高野支所産業建設室(0824・86・2113)まで。

企画課

研究成果の活用に期待  
庄原市県立広島大学研究開発助成事業報告会

市が助成し県立広島大学が取り組んだ研究成果を発表する「県大助成事業報告会」を11月18日、庄原市ふれあいセンターで開催しました。

当日は、これまで進めてきた研究のうち、平成24年度で研究期間が満了したものを中心に、各研究者が計5件を報告。事業者や市民など100人を超える参加者があり、竹を活用したヒラタケの栽培法確立、有色米糖化液を活用した新たな商品開発、ヒゴタイの保護増殖など、報告された成果やその活用方法をめぐって、活発な意見交換が行われました。

今後、研究成果を地域に還元する、事



報告内容について熱心に耳を傾ける来場者

情報政策課

庄原いちばんロゴが郵便物で全国に  
郵便局が庄原市PRロゴシールを市に寄贈

市は庄原郵便局が作製した庄原市PRロゴマークシールの寄贈を受けました。

庄原郵便局は、市が制定した「庄原市PRロゴマーク」をプリントしたシール4万5千枚を作製。10月25日、庄原郵便局の清水潔局長ら4人が市役所を訪れ、作製したシールのうち

2500枚を木山耕三市長に手渡ししました。

このシールは、日本郵政が経費を負担し、市内の22郵便局で特産品などを送る利用者に無償提供されます。シールを荷物に貼付するなどしてもらうことで、市内外へ庄原市がPRされるというものです。

寄贈を受けたシールは10月26日・27日に広島市で開催されたフードフェスティバル広島2013・第4回広島てっぴんグランプリなどで活用されます。

今後、市全体で一体となりオール庄原で市のPRを進めるため、市はこのマークの積極的な活用を呼びかけます。



深川卓美比和郵便局長(左)からシールを受け取る木山市長

自治振興課

### 移住希望者を庄原市へ呼び込む 市内で定住相談会を初開催

市は11月3日、市外の方を対象にした「庄原定住相談会」を庄原市ふれあいセンターで開催しました。これまで、大阪などの大都市圏で他の自治体と合同で行う相談会には出席していましたが、今回初の試みとして本市独自で市内で行う相談会を開きました。

当日は雨にもかかわらず遠くは広島市から20人を超える方が相談に訪れました。移住する際の不安な面や疑問に思うことなどを相談された職員は、空き家バンク物件や自治振興区活動の紹介など本市の情報を提供しながら、一つ一つ丁寧に相談に応じました。

本年度の定住相談件数は10月末時点で68件、昨年同時期に比べて30件増加しており、庄原市への関心が高まっています。

市は今後、課題となつてくる移住者の受け入れに必要な住宅や仕事を確保していくため、自治振興区や市内企業とも連携し、全市を挙げて定住の促進を図っていきます。

商工観光課

### 庄原観光の将来像を描く 観光地づくり講座

市は、観光の専門家を招いた「観光地づくり講座」を11月19日・26日の2回、庄原市ふれあいセンターで開催しました。

第1回では、じゃらんリサーチセンターの檜垣憲一プロデューサーが「観光客から見た庄原市はこうだ！」と題し、庄原市観光実態調査の分析結果を基に、本市の観光資源について消費者

の認知度や興味度を解説。消費者ニーズを踏まえた観光振興のあり方や、地域ならではの食や体験の大切さを訴えました。

講演後は、参加者による意見交換を行い、消費者のニーズに対応した旅行商品をそれぞれ企画し発表しました。

本年度、市は観光振興による地域経済活性化を図ろうと、今後5年間の観光目標や施策の方向性を明らかにする「庄原市観光振興計画」策定に取り組んでおり、この講座で寄せられた参加者の声を、計画づくりに生かしていきます。本計画は3月末の策定を目指しています。

生涯学習課

### 実業団選手から基本技術を学ぶ レベルアップスポーツ教室

庄原市レベルアップスポーツ教室を10月19日、市総合体育館で開催しました。

今回で6回目となるバレーボール教室には、市内の小学生バレーチーム7チームをはじめ91人が参加。和やかな雰囲気の中、講師のマツダ女子バレーボール部の選手12人からトスやレシーブの基本技術や動作、練習方法などを学びました。

子どもたちは集中力を切らすことなく教わった動作を繰り返し返すなど、終始真剣に取り組んでいました。

参加者は「丁寧に優しく教えてもら



会場の様子



アタックの練習



旅行商品を企画する参加者

保健医療課

### 市内での産科医療再開の早期実現を 備北圏域と庄原市の産科医療を考える集い

庄原市の地域医療を考える会（庄原市医師会・庄原赤十字病院・庄原市）は11月7日、「備北圏域と庄原市の産科医療を考える集い」を庄原グランドホテルで開催しました。

この集いは、平成17年4月から休止されている庄原赤十字病院の産科の再開に向けた課題を市民みんなで考えようという開催したもので、市民約260人が参加しました。

最初の基調講演では、産科婦人科の医師で広島大学大学院教授の工藤美樹さんが、広島県の産科医療の現状と課題をさまざまなデータを示しながら解説。広島県や広島大学などをつくる県周産期医療協議会が、産科医師を備北圏域に優先的に配置する方針を固めたという報道がなされたことについて、参加者から産科再開の目的がいつにな



講演する工藤教授



パネルディスカッションの様子

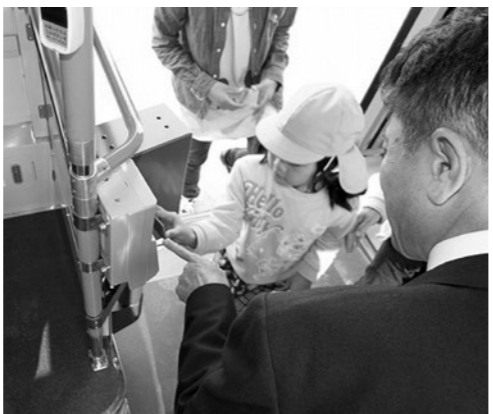
るか質問が飛ぶと、同協議会にもかわつている工藤さんは「時期は明言できないが、できるだけ早く再開したい」と答えていました。

続いて、パネリスト6人がそれぞれの立場で産科医療についての意見発表を行い、市内で出産できる体制の必要性を訴えました。

市は今後も関係機関と連携し、市内での産科医療再開の早期実現と、皆さんが安心して子育てができる環境の整備に努めていきます。

市民生活課

### 公共バスをもっと身近に 山内小学校で『バスの乗り方教室』



PASPYの利用を体験する園児

から見たバスの死角、行き先表示の見方、車両の機能の紹介、乗降の方法などを説明し、PASPYを使用した乗車体験も行われました。

PASPYのイメージキャラクター「くまピー」も会場に駆けつけ、子どもたちの人気を集めていました。

山内自治振興区の市川基矩区長は「地域の財産であるバスの実態を知ることができ、有意義な時間となった。今後も公共交通の必要性を多くの方に知ってもらうため、市やバス事業者と連携し、こうした機会を設けていきたい」と話していました。

「バスの乗り方教室」が11月2日、山内小学校で開催され、地域住民や山内保育所の園児など約40人が参加しました。

山内自治振興区、備北交通、市の三者が共催して行うこの教室は、自ら移動手段を持たない人が日常生活を送るために必要不可欠な「公共交通」を地域の財産として将来に渡って維持・確保していくため、公共交通に対する住民意識の向上と利用促進につなげることをねらいとしています。

当日はグラウンドに市内で実際に運行されているハイブリッド・ノンストップ型バスが登場。備北交通の田淵光明さんと門世良一さんが、運転手



子どもたちに大人気の「くまピー」